

化学療法を受けている子どもへの家族の食事支援

2階東病棟

○谷本 未来 町田 和嘉子 山崎 麻朱 大坪 佳代
武市 光世 坂本 美和

【研究目的と方法】A病院では、化学療法を受けている子どもの嗜好に応じた効果的な栄養摂取への方策を見出せていないのが現状である。本研究は、子どもの家族が感染予防食に対してどのような思いを持ちながら食事支援を行っているのかを明らかにすることを目的とした。看護部倫理委員会の承認後、研究内容と結果の公表について説明、同意を得た14名の家族を対象に半構成インタビューガイドを用いた面接調査を行った。

【結果】家族は感染予防食について『食事制限は必要 / 仕方がない』『栄養バランスがとれている』『安全なもの』と捉えていたが、『子ども向けのメニューではない』『子どもが食べられるものが少ない』『かわいそう』という思いを持っていた。そして、食べて良いものを『医療者に確認する』、看護師や栄養士に相談しながら『食事メニューを変更する』、調味料を使う、お弁当を作る、レトルト食品を活用するなど『持ち込み食に頼る』『食べる楽しみをつくる』、外泊の日を示して『モチベーションをあげる』などの対処行動をとり、食事摂取量を増やすための工夫をしていた。その一方で、持ち込み食に対しては『安全性への不安』や『栄養バランスの偏り』『経済的負担』を感じていた。要望としては、制限食のメニューの改善や調理場の提供、食事環境の調整が挙げられた。

【考察】家族は化学療法を受けている子どもの感染予防食の必要性については理解しながらも食べたいものが食べられないことへの葛藤が生じており、その中で、親としての責任を感じ、模索しながら食事支援を行っているが、自身の取り組みが適切かどうかの判断には迷いが生じていると思われる。看護師は家族の思いに寄り添い、子どもの食事支援と一緒に考えると共に、パンフレットやオリエンテーションの見直し、看護師教育を行っていく事が大切である。また、他職種と協働し病院食の改善や食事環境の調整を図ることが課題である。

[平成23年11月25～27日 第9回小児がん看護学会（群馬）にて発表]